

第四回ふくふく童話大賞「大賞」

夏の思い出

マアちゃんのおじいちゃんは釣りの道具を買いにいったお店の前で倒れ、病院に運ばれましたが、そのまま亡くなってしまうました。

遠くから親戚の人たちが大勢集まってきました。家の広間が片づけられて、大きな祭壇がつくられ、沢山の花やくだものが置かれました。それらを青や赤のちょうちんが明るく照らし出していました。

くだものや花の奥におじいちゃんの笑った写真が飾られて

いてまるで、

「マアちゃん、どれでも好きなものをもって食べなさいよ」

と言っているように見えました。

「マアちゃん、おじいちゃんに手を合わせるのよ」

お母さんと、祭壇の前で手を合わせながら、マアちゃんは尋ねました。

「お母さん、どうしておじいちゃんに手を合わせるの、おじいちゃんはどこへいったの」

「おじいちゃんは、マアちゃんや母さんには見えない世界に

行つたの。だから目をとじて、こうして手を合わせて心で話しかけるのよ」

「でもおじいちゃん返事をしないよ」

「おじいちゃんにはマアちゃんの声がちゃんと聞こえているから大丈夫よ」

つぎの朝、マアちゃんは目がさめるとすぐに、おじいちゃんと釣りに行く約束をしてたのを思い出しました。

「お母さん、おじいちゃんはいつ帰って来るの？」

「まあ、マアちゃん。おじいちゃんはもう帰って来ないの」

「でも、今日、魚釣りに行くって約束したんだよ」

「まあ、そうだったの……。でもね、おじいちゃんはもうマアちゃんと釣りに行けないのよ」

「そんなのやだよーっ、約束したんだもん約束したんだもん！」

お母さんもどうしたらいいのか分からなくなっ
てしまいました。

「そんなわがまま言っちゃいけません。仏壇に行っ
て教わったようにお線香をあげて、手を合わせなさい」

昨日とおなじように、お花やくだものの奥に、笑っ
ているおじいちゃんの写真がありました。

「うそだい、写真はおじいちゃんじゃないやい！」

「まあ、マアちゃん、なんてこと言うの」

マアちゃんは家をとびだしてしまいました。お父さんもお母さんも、しばらくそっとしておいてやろうと思いました。

「おじいちゃんはどこかにかくれてるにきまつてるんだ。今にきつとどこからか”やあマアちゃん、魚釣りに行こうか”って、帰ってくるにきまつてるんだ」

マアちゃんは釣り道具の店の前を通りかかりました。

「おや、マアちゃん、一人でどこへ行くんだい」

「おじさん、今日はうちのおじいちゃん、ここに来なかった

？ 魚釣りの約束をしてるんだ」

「・・・だってマアちゃん、おじいちゃんは昨日……」

お店のご主人はこれ以上言えずに店の奥にひっこんでしま
いました。

マアちゃんはいつのか海へ向かう道を歩いていました。

「本当ならおじいちゃんと、二人乗りの自転車で魚釣りにい
くはずだったんだ。今までずっとそうしてきたし、おじいち
ゃんは一度だって約束を破ったことはなかったんだ」

空がまぶしいほど青く、まっ白な雲が形を変えながら、ゆ
っくり流れていました。

「雲がお魚に見える日はたくさん釣れるんだぞ」

自転車をこぎながらおじいちゃんが話しかけてくれたっけ。

今日はどの雲も、おじいちゃんの横顔に見えました。おじいちゃんが自転車をガチャガチャいわせて「やあ、マアちゃん待たせたなーっ」といいながら、やって来るような気がしてマアちゃんはときどき後ろを振り返りました。

おじいちゃんが途中で自転車を止めて二人で休んだ枝の張り出した大きな木の下までやってきました。ここまできると潮っぽい風が吹いてきて、もうすぐ海だなというのが分かるのでした。

大きな木の根もとに座って、おじいちゃんはタオルで汗を拭き、マアちゃんは冷やしたジュースをクーラーボックスから一本とりだして飲むのがいつもの決まりでした。

マアちゃんは前に来たときと、なんだか辺りの様子が違うように思いました。おじいちゃんが一緒じゃないからだろうと始めは考えましたが、やがて蝉の声が無いことに気がつきました。

この前、来たときはうるさいほど鳴いていて

「いくらジュース飲んでも涼しくならないよ」と、おじいちゃんに文句を言ったほどでした。

おじいちゃんはニコニコしながら

「蝉はね、十日しか生きられないんだよ。しかも暗い土の中で、七年もじつとこの時を待っていたんだ。だからこの十日間は、蝉にとって最初で最後のお祭りみたいなものなのさ」

「じゃあ、十日たったら死んじゃうの。蝉は死ぬのが恐くないの？」

「ハツハツハツ、蝉はそんなことは考えていないさ。そんなことを考えるのは人間だけなんだよ。この次ここに来る時は、この蝉たちはきつといなくなってるよ。その時マアちゃん、どんな気持ちができるかな」

蝉の声も、おじいちゃんもいない大きな木の下でマアちゃん
んは一人で立っていました。

ポツカリと穴が開いたように静かでした。波の音がときど
き聞こえていて、足元に蝉の死骸が一つ落ちていました。

マアちゃんの目から涙が一つこぼれました。

「どうして涙がでるんだろう、虫の死んだのなんて、家の庭
で何度も見て

るのに・・・」

それからマアちゃんは海まで一気に駆け出しました。そし
て黄色い花の咲いている浜に突っ伏してわんわん泣きました。

やがて泣き疲れて眠ってしまいました。

「やあ、マアちゃん遅くなつてごめんな」

「あーっ、おじいちゃん、今までどこにいたんだよーっ、ずいぶんさがしたんだからーっ、もーっ、死んじゃったと思つたじゃない！」

「ハッハッハッ、心配させて悪かった。蝉と一緒に隠れていたんだよ」

「あゝあ、心配して損しちゃった。でも、どうして隠れたりしたの？」

「マアちゃんがどんな顔するかと思つてな」

「もうーっ、いじわるなんだからーっ！でも、おじいちゃん、今日、蝉がいなくなつてて、とても寂しい気持ちだったよ。去年はなんとも思わなかったのにな」

「そうかそうか、それはマアちゃんがひとつ大人になつたということだよ。マアちゃん、一つ、覚えておくんだよ。いなくなつたように見えても、蝉はまた来年も生まれてくるだろう」

「うん・・・でも同じ蝉じゃないんでしよう」

「もちろんそうさ、でも死んでいく蝉たちがいるから新しい蝉たちも生まれて来れるんだよ」

「じゃあ、死んでいった蝉たちは、どうなっちゃうの？ 死ぬために生まれてきただけなの？」

「ちがう、死んでいった蝉たちも新しい蝉の中にちゃんと生きてきているのさ」

「どうやって」

「思い出として・・・今年の蝉は去年の思い出の夏を生きるんだ。そして新しい思い出を残して死んでいく。蝉たちは思い出の中で鳴き続けているのさ。だから蝉が鳴くと、ああ、また夏が来たなあと分かるんだよ」

「人間にも思い出はあるの・・・」？

「そう人間にも・・・マアちゃんがあの大きな木の下に行つたとき、蟬の話しやジュースが冷たかったこととか、思い出したろう。おじいちゃんがそこにいるような気がしなかったか」？

「うん・・・した」

「あるとき、おじいちゃんはマアちゃんの心の中にちゃんと生きていたんだよ」

「来年になつても、おじいちゃんのこと忘れないよ」

「おじいちゃんもマアちゃんのこと忘れないよ」

おじいちゃんの思い出をしっかりと包み込むように、マアち

やんは両手を合わせました。

淡い花の香りで目が覚めたマアちゃんは、家へ帰ろうと思
いました。

今までは気がつかなかったけれど、家への道の途中に小
な杜がありました。

門をくぐると、奥に小さなお堂があり、その中に観音様の
像がありました。本のさし絵で見たことはありませんが、観
音様が手を合わせているのに、なぜか今日はじめて気がつ
いたのでした。

「ああ、観音様にもきつとおじいちゃんがいるんだろうな。そして思い出がたくさんあるんだ。だって、観音様はあんなにやさしい顔をしているんだもの」

マアちゃんは観音様をふり返りしながら、道に戻って行き
ました。

観音様はいつまでもマアちゃんの背中に手を合わせていました。

重庄太郎